

『カンタベリー物語』における結婚(1)

赤堀志子

序

ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer) の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) を構成する物語の一つ「騎士の話」(*The Knight's Tale*) は、カンタベリー物語において、騎士道精神を持った立派な騎士によって、最初に語られる物語である。チョーサーは、古典的サガである『テーベ物語』を当世風の語り口にし、「騎士の物語」を再構築した。この物語の歴史を遡っていけば、スタティウスの『テーベ物語』(*Thebaid*) にたどり着くが、チョーサーが直接、典拠としたのは、愛と戦争を描いたボッカチオ (Giovanni Boccaccio, 1313-1375) の作品、『テセイデ』(*Il Teseida delle nozze d'Emelia* [英訳すると *The Story of Theseus concerning the Nuptials of Emily*], 1339-41) である (DiMarco, V. J. in *The Riverside Chaucer*, 826)。封建社会の誕生とともに生まれた騎士階級は、戦争で手柄を立てることで名声を高め、富を手に入れ、貴族社会を登っていくものであるが、チョーサーは、再構築するにあたって、戦争の場面を大幅に削除し、代わりに「生」と「死」、「勝者」と「敗者」に焦点を当てている。この「勝者」である騎士が手に入れるものが、結婚である。「騎士の物語」でも書かれているように、婦人のために戦うことは騎士にとって名誉なことであった。戦いに勝った騎士は戦利品として女性を手に入れ、敗者は「死」を遂げる。その死は、名誉の死となるが、その背後には戦利品となったり、あるいは身分を失い、落ちぶれていく女性の姿がある。

本論では、中世の騎士道精神、「騎士の話」の主軸を成す生と死との関連を考えながら、「騎士の話」に描かれる結婚に注目する。第1章では、主として「騎士の話」の結婚については、「バースの女房の話 前口上」、「バースの女房の話」(*The Wife of Bath's Prologue and Tale*) に見られる結婚観と対比させながら、騎士道精神とキリスト教における結婚の考え方を考察する。次の第2章では、「騎士の話」の対とされる、「粉屋の話」(*The Miller's Tale*) の結婚に焦点を当て、騎士道における結婚の理想との対比を見る予定である。

第1章 「騎士の話」に見る騎士の理想の結婚

1-1. 騎士道精神とキリスト教

ヨーロッパにおいて、10世紀までは結婚制度がまだ確立しておらず、一夫一婦制の結婚制度の概念がカトリック教会により確立されるのは、12世紀に入ってからであった。元来、教会は結婚に対して否定的であった。教会は、福音書にまったく書かれていないということを根拠に、性的欲望を否定していた。教会にとって結婚は、子孫を残すための手段であり、性的欲望は、子孫を残すことに向けさせる手段としてのみ容認されていた。このキリスト教における性的欲望への嫌悪は、聖アウグスティヌスが断罪したことに始まる。性的欲望は原罪と結び付けられた。教会は、異性に触れずに生涯

を過ごすことが理想であると説き、聖職者の結婚を禁じていた。

騎士道の精神は、このキリスト教の精神と切り離すことができない。まず、騎士として認定される、叙任式の儀式内容を見てみると、教会の儀式と重なっていることが分かる。従騎士と呼ばれる、騎士の見習いは、貴族の下で何年か奉公をした後、従騎士として騎士に仕えることになる。従騎士となってからは、騎士の身の回りの世話から馬の世話まであらゆることをこなさねばならない。従騎士を一人前の騎士として認めよう、ということになると、叙任式が行われる。叙任式の前日、従騎士は、まず教会へ参上し、告解を行う。その後、祭壇の上に騎士の証となる剣を置き、そのまま教会で一晩を過ごす。夜明けを迎えると、聖体を拝受する。その後、教会を出て、広場で叙任式が行われる。

叙任式においても、司祭が重要な役割を果たす。前日から祭壇に供えていた剣に、司祭が祝福を与える。祝福の与えられた剣を、従騎士が仕えていた騎士が受け取り、腰帯に収め、従騎士の腰にその腰帯を巻き、足に拍車をつける。その後、従騎士は司祭の述べる騎士道の誓いを復唱し、その間に、付き添いの手により、冑、鎧、盾が身につけられて、武装が整えられる。最後に、騎士が従騎士の首を強くたたくと、儀式は完了し、宴会へとなだれこむことになる。

叙任式に明確に反映されているように、騎士道はキリスト教と深く結び付いていると言えるが、騎士道の教えにもキリスト教の考え方を見ることができる。騎士道や騎士文学といえば、「宮廷愛」(courtly love)である。この宮廷愛、つまり騎士が貴婦人に焦がれる愛は、精神的な愛であるべきだとされていた。キリスト教は、前述の通り、性的欲望を嫌悪していた。この宮廷愛は、キリスト教のこの教えに反することのない、精神的な愛である。騎士が宮廷愛を求める女性は、自分より高い階級の女性であることが望ましかったため、主に自分の主君の妻であることが多かった。また、当時の結婚が、愛のためというよりも子孫を残すための契約であったということを考えれば、騎士が結婚生活では抱かなかつたであろう恋愛感情を宮廷愛に求めたと言えるかもしれない。

とは言え、宮廷愛は、建前としては精神的なつながりを指してはいたが、完全に肉体を超越したもののとは言えなかった。たとえば、騎士は自分の崇拝する女性の外見や体を賛美し、女性に恋焦がれて苦しむ様子が、文学作品の中にもよく描かれている。女性は最初はつれないそぶりを見せるが、それこそが、騎士が女性の愛を勝ち取ろうと戦いにおいて名誉な手柄を立てることに全力を尽くす起爆剤となるのである。戦いで手柄を立てた場合には、貴婦人からキスや抱擁などの褒美が与えられることもあった。

このように、女性は崇拝の対象とされたが、それは同時に褒美そのものでもあったと言えないだろうか。『カンタベリー物語』の「騎士の物語」には、女性のこのようなあり方が、戦いに結び付けて描かれている。

1-2. 「バースの女房の話」に見る結婚と支配権

一方、『カンタベリー物語』の語り手の一人であるバースの女房は、「バースの女房の前口上」においても「バースの女房の話」においても「支配権」(governance)をテーマとして語っている。支配権を持つことで女性は幸せになる、というのが、バースの女房の主張する結婚観である。

「前口上」において、バースの女房は、5人の夫を持ったと告白し、それぞれの夫との結婚生活を、なめらかな毒舌で語る。最後の夫であるジャンキン(Jankyn)には、これまでに手に入れた土地や財産を、結婚時にすべて譲渡したが、すぐに後悔し、暴力沙汰となる夫婦喧嘩の末、ジャンキンから

「家と土地の支配権をぜんぶわたしに譲」らせたばかりでなく、「彼の舌も手も」支配することになり、女性の悪行の書かれている「愛読の書物は全部、その場で焼かして」しまい、「首尾よく、全主権を握ることができた」(西脇, 243) と語る。

He yaf me al the bridel in myn hond,
To han the governance of hous and lond,
And of his tonge, and of his hond also;
And made hym brenne his book anon right tho.
And whan that I hadde geten unto me,
By maistrie, al the soveraynetee, (The Wife of Bath's Prologue, 813-18)¹⁾

また、結婚した5人の内、3人は良い夫であったと述べている。その理由を、まず、「金持ちで年を取っており」と言い、「彼らはわたしに地所や富を与えてくれ」たので、「あの人たちの愛を得ようだの、あの人たちに尊敬を払ったりだのとさらに骨折る必要はわたしにはありませんでした」(梶井(中), 15) と述べている。つまり、結婚はお金を手に入れるための方便にすぎず、契約である、ということ述べているのである。

They had me yeven hir lond and hir tresoor;
Me neded nat do lenger diligence
To wynne hir love, or doon hem reverence.
They loved me so wel, by God above,
That I ne tolde no deyntee of hir love! (The Wife of Bath's Prologue, 204-08)

バースの女房は、自分の夫に対する酷い扱いについて「だがわたしが彼らをすっかり手中に握っており、しかも彼らも地所をすっかりわたしに与えてしまった上は、なぜわたしが彼らを喜ばせようと気を配ったりする必要がありましようか。それが私の利益になったり、わたしの楽しみになったりするのなら別の話ですけど」(梶井(中), 16) と弁護している。

But sith I hadde hem hoolly in myn hond,
And sith they hadde me yeven al hir lond,
What sholde I taken keep hem for to plese,
But it were for my profit and myn ese? (The Wife of Bath's Prologue, 211-14)

Gist は、中世時代における結婚は、政治的、軍事的、経済的な優位性を確保するための法的な強制的契約であり、便宜を図るための制度であったから、結婚の中に女性を求める要素はほとんど含まないと述べている(17)。これは貴族社会の結婚の現実を述べた言葉であるが、チャーサー文学が庶民生活の現実を反映しているとすれば、庶民の世界でもお金のための結婚ということが広く行われていたのではないかと考えられる。夫が土地の権利を妻に与える、というエピソードは、「貿易商人の話」(The Merchant's Tale) にも登場する。老人ジャニュアリ(January)と若い妻となるメイ(May)の結婚の準備の際に、「さて彼女が彼の土地を法律上所有するようになった契約と証文をことごとくお話ししたりするなら、あなたがたをたいへん長く引き止めておくことになりましよう」(梶井(中),

190) と書かれており、かなりの財産がメイの手に入ったことが暗示されている。

I trowe it were to longe yow to tarie,
If I yow tolde of every scrit and bond
By which that she was feffed in his lond,
Or for to herknen of hir riche array. (The Merchant's Tale, 1696-99)

バースの女房は、過去の夫の内3人について、「金持ちで年を取っており」、「良い夫」だったと述べたが、まさに、ジャン્યアリも「金持ち」であり、「年を取って」おり、メイにとって「良い夫」(梶井(中), 15) だったということになる。

また、長い前口上の末に、バースの女房の語る話も、支配がテーマである。バースの女房は、あるアーサー王の側近の騎士の話をする。この騎士は森で一人のうら若き乙女を発見し、その乙女に暴行を働く。その罪で、彼は法の裁きのもと、死刑の宣告を受けるが、王妃を始めとする貴婦人が騎士の命乞いをしたため、王は妃に一命を託すことにする。妃はその騎士に、12カ月と1日後に、女性が最も望むものは何か、という答えを持ってくれば命を保障しよう、と告げる。騎士は答えを探す旅に出て、森の中で出会った世にも醜い老婆から、その答えが支配権を持つことであることを教えられる。妃の御前で騎士は、「どこにおいても、女性たちは愛人に対してはもとより、夫に対しても支配権をもつことを願い、彼の上に君臨することを願っております」(梶井(中), 50) と述べる。

“Wommen desiren to have sovereynetee
As wel over hir housbond as hir love,
And for to been in maistrie hym above. (The Wife of Bath's Tale, 1038-40)

この答えはその場にいたすべての人の気に入る、騎士は命をとりとめる。騎士がこの答えを得るまでには、まさに1年を要し、その答えに納得するにはまだ時間がかかるのであるが、実は最初から妃により答えは差し出されていた、と言える。まず、王が、法の定めに従って、騎士に死刑の判決を下す。ところが、妃と他の貴族の妻との命乞いにより、王は騎士の処遇を妃の手に委ねることにする。つまり、自分の夫であるとは言え、一国の王の決定を覆すだけの力を妃が与えられていることをまず冒頭で示している。さらに言えば、騎士が生きるか死ぬかは、この妃の手1つにかかっている。妃は、この騎士の命に関して生殺与奪の権を握る支配者として君臨しているのである。

騎士は、答えを与えてくれた老婆の出した条件に従い、嫌々ながらに老婆と結婚することになる。騎士は、老婆が醜く、卑しい身分で、年を取っているのを忌み嫌う。そこで、老婆は、醜く年取ってはいるが貞節な妻であるのが良いか、それとも美しいが姦通の恐れのある妻が良いか、どちらかを選ぶようにと騎士に言う。騎士は、よく考えた後、「わたしはあなたの賢い指図にお任せします」と選択権を妻に譲り、「二つのうちいずれであっても構いません。だってあなたの気に入ることでわたしには満足ですから」(梶井(中), 58-59) と支配権を妻に渡す。

I put me in youre wise governance;
Cheseth youreself which may be moost plesance
And moost honour to yow and me also.

I do no fors the wheither of the two,
For as yow liketh, it suffiseth me.”

(The Wife of Bath's Tale, 1231-35)

支配権を女性に渡したことで、妻は若く美しくなり、二人で一生幸せに暮らした、という具合にバースの女房は幕を閉じる。

騎士は醜く身分の低い者と結婚しなければならないと言って嘆く場面があるが、実際には貴族や王族などの間では身分違いの結婚はあり得ず、そういうことは不名誉なこととされていた。チョーサーは、世襲制度により騎士になった者たちの、自分の身分と富に対する見当違いの奢りと、外見ばかりに囚われて内面を見ようとしないうちに起こる姦通を、バースの女房を通じて語らせているのである。

1-3. 「騎士の話」における結婚の支配権

バースの女房が、結婚における支配権は女性が握るべきと主張する一方で、騎士の語る物語における結婚は、セーセウス (Theseus) とイポリタ (Ypolita) の結婚にせよ、パラムン (Palamon) とエメリー (Emelye) との結婚にせよ、どちらも男性が支配権を握っている。

騎士は、『カンタベリー物語』で最初に物語を話すことになった人物である。この騎士は、「総序の歌」(General Prologue) で「立派な人物 (A KNIGHT ther was, and that a worthy man, (43))」であり、「勇敢ではあったが、一方賢明でもあり、その態度は乙女のように優しかった (And though that he were worthy, he was wys, / And of his port as meeke as is a mayde. (68-69))」(西脇, 8-9) と、述べられている。この“worthy”という語は、Davis, et al. の *A Chaucer Glossary* によれば“distinguished”, つまり「卓越した, 気品のある」という意味で使われている (176)。騎士は、中世においては貴族に属し、紳士と同等の立場にあった。

この気品のある騎士の語る物語は、その生きる道とも言える騎士道ロマンスである。チョーサーは、ボッカチオの『テセイデ』を語り直すにあたり、戦争の描写部分を大幅に削減し、勝者がいれば、その背後に敗者がいる、という戦争の代価に焦点を絞り、戦争と愛とを結び付けることで、新たな物語に生まれ変わらせた。騎士の物語では、愛とは勝者が勝ち取るものであり、敗者が失うものとして描かれている。

戦争の勝者イコール愛の勝者という図式は、この物語の冒頭から描かれる。それにより、騎士の物語のテーマが提示されたと言えるであろう。物語は、アテネの領主であるセーセウスが、スキタイと呼ばれた「女人国」(Femenye) との激しい戦いに勝利を納め、アテネへと堂々と戻ってくる場面に始まる。セーセウスは、このスキタイの女王であったイポリタと結婚し、その妹であるエメリーも連れ、凱旋する。騎士はそもそも、戦利品を目的として戦場へと赴く、血気盛んな戦闘要員であった。封建制度が成立すると、騎士は領主との契約に基づく主従関係を結び、領主の命令であれば命を張って闘う代わりに、戦いの費用などが補償されるようになったが、封建制度以前は、金銭的に困窮すると、略奪目当てで剣を振るうということも珍しくなかった。そこで封建制度は彼らに騎士という称号を与え、武勲を立てることはもちろんのこと、主人に忠義を尽くし、信仰や礼儀を重んじ、女性などの弱者を保護すること、貴婦人に献身することを美德とするキリスト教的道徳観を基盤とした、騎士道という独特の文化を確立していったのである。

そのことを考えれば、騎士の物語におけるイポリタは、騎士道精神に則り、結婚という倫理的な制

度に基づいて、丁重に扱われた、と考えられる。しかし、同時に、女性が戦利品として扱われているということも間違いない。イポリタとエメリーは、戦利品ではあるが、その身分の高さから丁重に扱われていると言える。だが、それはあくまでも、セーセウスの側あるいは語り手である騎士からの見方であり、イポリタとエメリーからしてみれば、自国を滅ぼされた上に、結婚まで強制されたということになる。

チャーサーは、この敗北者の側にも視線を向け、セーセウスの凱旋の途中に出会う、嘆き悲しむ女性たちの集団を描いている。物語の冒頭、イポリタと妹のエメリーを連れてアテネに凱旋途中のセーセウスは、喪服を着た女性たちが土下座しているのに出会う。話を聞けば、テーベを征服したクレオンに夫を殺された、元王カパネウスの妃や王族の妻たちであった。ここで、セーセウスは、「かつては高い身分であったものが、このように落ちぶれはてたのを見ると、心も破れんばかりに同情」し、「彼らのためにできるだけのことをして暴君のクレオンに対して仇を取ってやろうと、真の騎士としての誓い」(西脇, 40)を立てる。

This gentil duc doun from his courser sterte
With herte pitous, whan he herde hem speke.
Hym thoughte that his herte wolde breke,
Whan he saugh hem so pitous and so maat,
That whilom weren of so greet estaat;
And in his armes he hem alle up hente,
And hem conforteth in ful good entente,
And swoor his ooth, as he was trewe knyght, (The Knight's Tale, 952-59)

チャーサーは、この誓いにより「すべてのギリシャ人に、クレオンはセーセウス公に打たれ、当然受くべき報いを受けたのだと言わせようというのである」(西脇, 40)と述べている。つまり、この泣いている女性たちの仇打ちという名目で闘うことにより、クレオンを打ち負かすことの原因が立つ、というわけである。また、ここでチャーサーは、セーセウスに対して、gentil という語を用いている。この gentil とは、noble 「高貴な」という意味である。語り手である立派な騎士自身が、自分の物語に登場する騎士を gentil と形容していることから、当時の騎士、そして通念として、これが当時の騎士道として正しいあり方だと考えられていたことが分かる。

チャーサーは、このエピソードに焦点を当てることにより、勝者の背後にいる敗者の存在を読者に気づかせようとしたのではないだろうか。勝者の側から見た輝かしい勝利の裏で、搾取され、打ちのめされている敗者の様子を描き、それに対するセーセウスの情け深さを描いている。この打ちのめされた女性たちは、女人国の側から見たイポリタとエメリーの立場に相当する。

He wolde doon so ferforthly his myght
Upon the tiraunt Creon hem to wreke
That al the peple of Grece sholde speke
How Creon was of Theseus yserved
As he that hadde his deeth ful wel deserved. (The Knight's Tale, 960-64)

王クレオンの討伐に向かうセーセウスの戦いは、勝利に終わる。騎士道に則って一騎打ちでクレオンを打倒し、都を破壊するセーセウスの戦いは、淡々と描かれ、勝利の輝かしさが強調されることはない。しかし、女たちの悲しみは、亡夫の亡骸を火葬にすることで癒される。

セーセウスがアテネにもどると、物語の焦点はセーセウスとイポリタの夫婦から、エメリーと、そのエメリーに恋焦がれる二人の男性、アルシータ (Arcita) とパラムンに移る。アルシータとパラムンは、先のセーセウスによるテーベ制圧の際に、クレオンの下で闘った騎士たちで、死骸の山を漁るかっばらいが、瀕死の傷を負ったアルシータとパラムンを死骸の山から見つけ出し、セーセウスに引き渡したことから、二人は一生身請けを許されずに、塔に閉じ込められる。

その牢獄から二人が目にするのが、庭を歩くエメリーである。騎士道から見て“gentil”な騎士により語られるヒロインであるから、エメリーの姿は、当時の騎士道から見て騎士が憧れるに相応しい女性の姿を象徴していると考えられる。エメリーの美しさは、「緑の莖に開くゆりの花よりも美しい、またあざやかな花の咲く五月よりも美しいエメリーが——というのも、彼女の顔色はばらの色と競い、いずれがいずれとも私には判断がつかないからだ——」と讃えられ、また「眼の覚めるような、きれいな着物をきて、黄色い髪をおさげに編んだ。一ヤールもありそうに見えるほど、長くうしろに垂れて」おり、「赤白のまじりの花を摘んで、頭髪を飾る花冠をつくりもした。天使のように清らかにうたいもした」(西脇, 42-43) と描かれている。

That Emelye, that fairer was to sene
Than is the lylie upon his stalke grene,
And fressher than the May with floures newe—
For with the rose colour stroof hire hewe,
I noot which was the fyner of hem two—
Er it were day, as was hir wone to do, (The Knight's Tale, 1035-40)

Yclothed was she fressh, for to devyse:
Hir yelow heer was broyded in a tresse
Bihynde hir bak, a yerde long, I gesse. (The Knight's Tale, 1048-50)

She gadereth floures, party white and rede,
To make a subtil gerland for hire hede;
And as an aungel hevenysshly she soong. (The Knight's Tale, 1053-55)

エメリーの美に対する称賛は、騎士が恋に落ちるのに相応しい女性であることが強調され、パラムンとアルシータの二人がエメリーのために苦しみ、そして決闘へと突き進む要因となりえるように、描かれている。このエメリーの美しさの描き方について、河崎は、チャーサーが「エメリー姫の存在を『空なるもの』として」(186) 描くことで、「一種の偶像崇拜的役割をエメリー姫が果たしている」² のだと述べている。つまり、エメリーの美しさを、現実の女性の美しさを超えた、超自然的な美しさとして描くことで、宮廷愛の女性崇拜の象徴として描いているのである。実際に、最初にエメリーを目にしたパラムンは、「それが女か女神か、おれにはわからない」(西脇, 45) とエメリーの非人間的な美しさに溜息を洩らす。

エメリーは「偶像崇拜の象徴的存在」として描かれている一方で、騎士道ロマンスとは一線を画する点がある。それはエメリーが既婚者ではない、という点である。エメリーは、捕虜として牢獄に閉じ込められているパラムンやアルシータよりも社会的地位は上にあり、美しく、遠く離れた存在である、という点で、騎士道ロマンスの貴婦人像と一致するが、未婚であるため、実際に手に入れることが可能な存在である。多くの場合、既婚者の妻である貴婦人は、騎士よりも階級が上の存在であり、また肉体的な結び付きを求めれば姦通となり、主君に対する反逆罪となりえた。手の届かない存在であるからこそ、貴婦人は騎士に対して支配権を握ることもできたと考えられる。イポリタではなく、エメリーが崇拜の対象となることで、エメリーは男性に対する支配権を持つどころか、褒美として与えられる存在となってしまうのである。

エメリーは、女神ディアナに純潔のままであることを祈るが、その祈りは届けられず、結婚する運命にあることを告げられる。河崎は、エメリーには二重性があるとし、エメリーは、思想と魂の純粋性を表す百合と、性愛やキリストの受難を表象するとされる薔薇の両方で表され、さらに性的儀式を暗示する五月のイメージが使われていると述べている(186-87)。Aersが述べているように、この性愛と純潔の融合は、ロマンス文学における崇拜すべき女性の伝統的な描かれ方であり、このエメリーの外見も、西洋の男性の手による文学や絵画における女性の描かれ方の王道である(77)。つまり、エメリーが純潔を守ることが望みながら、結婚へ進まざるを得ない二重性が表されている。キリスト教を色濃く反映する騎士道ロマンスに相応しい女性とは、キリスト教の教えに従順に従う女性であり、すなわち、生涯の純潔を望む女性ということになる。一方で、エメリーの意思に反し、騎士の決定により結婚せざるを得ないという運命は、女神にさえも付与されており、女性の弱い立場が浮き彫りにされている。

アルシータとパラムンは、エメリーに恋焦がれ、結婚を求めて騎士道に従って決闘を行う。しかし、その決闘は、実は政治的な意味合いを含んでいる。まず、二人は森の中で個人的な決闘をしているところを止められ、その土地の領主であるセーセウス主催で、決闘が行われることになるのだが、これはもはや決闘は個人的なものではなく、セーセウス支配下の、つまり国家的な行事への変容を意味する。さらに、アルシータとパラムンという、もとは捕虜であった二人の決闘のために、セーセウスはわざわざ決闘場を建設するが、その決闘場が莫大な費用をかけて作られた立派なものであることも、決闘の性質を表している。これは、セーセウスの財力、政治力の誇示以外の何物でもない。その上、決闘はアルシータとパラムンの二人だけで行うのではなく、それぞれがきっちり100名の騎士を連れて決闘をする、とセーセウスが決めたことで、もはやアルシータとパラムンの手を離れ、セーセウスによる一大行事となったことは明らかである。当時の戦いにおいては、両陣営がまったく同じ人数で戦いに及んだ、ということはよくあることだった(鯖田, 262-3)。これは、騎士にとって戦争が一種のスポーツあるいは競技となっていたことに起因する。また、闘技場で行われる決闘においては、多くの観客が見込まれ、その中に貴婦人も含まれていた。貴婦人に良いところを見せ、その寵愛を獲得しようとする、宮廷愛の精神が、闘技場における決闘の根底にあったと言える。

このように、エメリーは、結婚するに至るまで、支配権も決定権も一切持たない。エメリーの存在する庭と、パラムンとアルシータの存在する牢獄の塔とは隣り合わせとなっている³。しかし、エメ

リーからはパラムンとアルシータは見えず、エメリーの知らないところで、パラムンとアルシータは勝手にエメリーの美しさに傷つき、いがみ合い、決闘をする。そして、最後はアルシータの死と、パラムンとエメリーの結婚を迎えることになる。読者にとってのエメリーは、アルシータやパラムンの目を通じて、エメリーに対する熱い想いが繰り返し語られるだけで、客観的な描写というものがほとんどなく、現実感に乏しい。エメリーは、パラムンとアルシータの競技が行われる直前、競技場のヴィーナスに祈りを捧げるときは、潔く禊ぎを行い、作法に則って儀式を行い、生涯独り身でいたいと、自分の意思をはっきりと見せる。この祈りの場面においてのみ、エメリーは、客観的に描かれ、現実の存在、生身の人間となり、自分の意思をはっきりと述べる。読者が初めて、そして唯一、エメリーの真意を知ることのできる場面である。

エメリーの希望は叶えられないことがすでに決定しているとヴィーナスに告げられる。エメリーも、希望が叶わないなら、せめて私をより愛してくれる人と結婚できますように、と祈りを捧げる。試合の結果、パラムンと結婚するが、パラムンのほうがエメリーを愛しているから勝ったわけではなく、神々の事情によってパラムンが勝ったのである。

最後に

本論では、『カンタベリー物語』における結婚の描写に焦点を当て、異なる結婚観を比較した。騎士道精神における女性礼賛の陰にある、女性の低い地位という前提に対し、バースの女房の提唱する、結婚における女性の支配権という二つの結婚観が見られた。チョーサーは、この二つの結婚観を、巧みに様々な登場人物に語らせ、『カンタベリー物語』の中に織り込んでいる。

注

- 1 本論において、原文からの引用はすべて、*The Riverside Chaucer* (Benson, Larry D., 1988) による。また、訳については、『カンタベリー物語 上』(西脇, 1989)と、『完訳 カンタベリー物語 (上)・(中)』(榎井, 1995)を使用した。
- 2 河崎, p. 348 の注 (12)。
- 3 「この城のおもなる牢獄であった、厚い堅固な大きな塔(その中に、先に述べた、またこれからも話そうとしている、例の二人の騎士が捕われていた)は、この庭園の壁にすぐくっついていた」(西脇, 43)

引用文献

Benson, Larry D., *The Riverside Chaucer* 3rd ed., OUP. 1988.
チョーサー, ジェフレイ著, 西脇順三郎訳, 『カンタベリー物語 上』東京: 筑摩書房, 1989年。
チョーサー, ジェフリー著, 榎井迪夫訳, 『完訳 カンタベリー物語 (上)・(中)』東京: 岩波書店, 2003年。

参考文献

河崎征俊『チョーサー文学の世界〈遊戯〉とそのトポグラフィ』東京: 南雲堂, 1995年。
ジェラルド, A. 池田健二訳『ヨーロッパ中世社会史事典』東京: 藤原書店, 1991年。
チョーサー, ジェフレイ著, 西脇順三郎訳, 『カンタベリー物語 上』東京: 筑摩書房, 1989年。
チョーサー, ジェフリー著, 榎井迪夫訳『完訳 カンタベリー物語 (上) (中) (下)』東京: 岩波書店, 1995年。
鯖田豊之『世界の歴史〈9〉 ヨーロッパ中世』東京: 河出書房新社, 1989年。
ホプキンズ, アンドレア著, 松田英, 都留久夫, 山口恵里子訳『図説 西洋騎士道大全』東京: 東洋書林, 2005年。
Aers, D., *Chaucer*. Harvester Press Ltd., 1986.
Benson, Larry D., *The Riverside Chaucer* 3rd ed., OUP. 1988.
Davis, N. et al., *A Chaucer Glossary*. OUP., 1979.
Martin, P., *Chaucer's Women: Nuns, Wives and Amazons*. Macmillan Press Ltd., 1990.

(あかほり なおこ 文化創造学科)